

大阪天満宮社報

第55号

てんまつんじん



遷宮で結ぶ人の輪心の輪
第六十二回神宮式年遷宮



年首御慶

己丑元旦

光格天皇御下賜御真影	4 頁
H O P E ゾ ー ン 協 議 会 発 足	6 頁
えびす祭に祝福行列	8 頁
特別展「国宝 天神さま」	10 頁
千代崎行宮	12 頁
タイ王国ロイクラトン	14 頁
懐かしの街頭紙芝居	16 頁

表紙解説

《渡唐天神像》

大阪天満宮所蔵 紙本墨画
縦七四・九cm 横三二・四cm
近衛信尹筆 桃山時代

大阪工業大学准教授 松浦 清

戯画風というべきか、漫画的というべきか、一筆書きのような筆遣いで表現された水墨画の天神像です。簡略ながら、仙冠に道服姿という中国の着衣形式が認められるので、いわゆる渡唐天神を描いたことがわかります。禪の奥義を象徴する袈裟の入った定型の袋や梅の枝は、本図では省略されています。

顔は細線を用いて目鼻や鬚髯を表現し、その他は太い筆線の勢いを生かして一気に描き上げています。よく見ると、仙冠を天神の「天」の文字で表現しており、道服は「神」の文字を巧に利用しています。なんとも軽妙な独特の作風は絵と文字の融合によるものでした。

天神の右脇の墨斑は汚れではありません。桃山時代の公家近衛信尹の花押すなわち簡略化された署名です。信尹の幼名は明丸で、天正五年（一五七七）に織田信長を加冠役として元服し、その諱の一字をもらって初名を信基としました。父前久の出家により、信輔を名乗ります。

画賛の「今須望足／護／皇基」は天神画像にしばしば揮毫される「昨為北闕被悲士／今作西都雪恥戸／生恨死歎其我奈／今須望足護皇基」の第四句に当たります。全体を意識すれば次のようになるでしょうか。

「かつて左遷の悲痛を味わい、今や大宰府で屍となりながらも恥辱を雪ぐこととなった。生きて恨みを残し、死して後に歎びを得る思いは言葉にし難い。望みがかなった以上、今後は皇室を護る神となろう。」

これは「菅家後集」に記載されますが、後世の偽作です。例えば『太平記』（巻十二の三）には、怨霊となつて清涼殿に落雷した天神の魂を鎮めるために、左遷の宣命を破棄して正一位太政大臣が追贈された際の天の声として記されています。

この画賛と信輔の天神信仰を考える際、天正十三年（一五八五）の関白相論に触れる必要があるでしょう。それは信輔が摂関家筆頭の近衛家当主に相応しい地位として関白の官職を求めたことによる、現関白二条昭

実との間の人事抗争です。発端は天下人となった羽柴秀吉が左大臣の官職を望み、現左大臣の信輔が官職を辞さねばならぬ事態に陥ったことにあります。泥沼化する抗争は秀吉が関白に就任するという前代未聞の事態で決着しました。七百年続いた摂関家の伝統が崩れて武家関白制が成立した瞬間です。近衛家側は秀吉から再び信輔に関白の官職が譲られることを条件に認めざるを得なかったのですが、秀吉はその後、豊臣の姓を賜り、秀次に関白を譲り、自らは太閤となります。秀次へ関白を譲ることは近衛家側に対する約束違反ですが、ここにも秀吉の巧妙な策略が仕込まれていました。結局、信輔は文禄元年（一五九二）に左大臣を辞任し、内覧への就任を希望するようになります。

内覧とは、天皇に奏上または天皇が裁下する文書を先に内見する令外官の役職で、関白に準ずる地位にあります。これが秀吉の怒りを買い、また、信輔は参内しないどころか、秀吉の朝鮮出兵に際して、自ら朝鮮に渡るため肥前名護屋に赴くという暴挙に出たため、後陽成天皇は勅書をもってこれを制止することとなりました。信輔の一連の行動は、直情型の性格を反映し、摂関家

筆頭である近衛家の当主としての苦悩も示しています。文禄三年（一五九四）には秀吉の奏上によって、ついに勅勘を蒙り、信輔は薩摩坊津に配流となってしまいました。

薩摩配流は秀次の切腹という思わぬ事態から二年半で終止符を打つことになりましたが、その間の彼の心中は察して余りあるといえるでしょう。都に戻った信輔は信尹と改名し、慶長十年（一六〇五）に関白の詔が下ります。関白相論から実に二十年の歳月が流れていました。

『古画備考』（三・廷臣）によれば、信尹は天神画像を百幅描いたとされます。作例は慶長十四年（一六〇九）と翌年に集中していますが、彼が天神画像を描き続けたのは、菅公の左遷を自らの配流と重ねていたからと考えざるを得ません。配流決定に際して秀吉の側近に宛てた反論書には、内覧の先例として時平公より先に菅丞相を挙げていることも、天神への思いの強さを窺わせます。

信尹は本阿弥光悦、松花堂昭乗とともに寛永の三筆と称えられる能書で、力強く豪快な三藐院流の祖となります。天神が書道の神として広く信仰されていたことも信尹との浅からぬ縁を思わせます。

新刊紹介

『北野天神縁起を読む』

昨年十一月に出版された本書は、「歴史と古典」シリーズ（全十巻・吉川弘文館刊）の一冊として編まれたものです。

当宮で開催している天満天神研究会のメンバーでもある同志社大学の竹居明男教授が編集にあたり、「Ⅰ 北野天神縁起を読む」「Ⅱ 北野天

天神さんと牛

竹居 明男

江戸時代初期の儒学者林羅山の著作『本朝神社考』に、「諸社の使者」として八幡の鳩、日吉の猿、気比の白鷺、稻荷の命婦（狐）、春日の鹿、熊野の鳥などを列挙しているように、天神社・天満宮の牛も、そのような神の使者の一つとして著名である。

実際、多くの天満宮・天神社の境内には臥牛の像が置かれ、江戸時代初頭ごろには、道真の命日にちなむ二十五日以外に、丑の日に参拝することも行われていたようである（北

神縁起の世界」Ⅲ 中世・近世における北野天神縁起」の全三章に、計八本の論文が収められています。同じく天満天神研究会メンバーである北海道大学の鈴木幸人准教授も論文「近世における北野天神縁起絵巻の制作」を寄せています。

「北野天神縁起」とは、菅原道真公のご生涯から、没後の神格化、天神信仰の流布にいたる経緯を描いたもので、天神信仰研究の根本史料です。

当宮も何点かの縁起を所蔵している野天満宮文書。さらにさかのぼって、鎌倉時代初めの承久本『北野天神縁起絵巻』でも、第一巻巻頭「幼児化現」の段の菅原是善邸門前に意味ありげに牛が描かれ、それより以下、道真配流の陸路、道真の埋葬、天台僧尊意の鴨川渡水の各場面でも牛車を引く牛が配されており、すでに牛とのただならぬ関係がそれらの画面の背景にあつたようにみえる。

さて、その由来については古来から諸説あつた中で、一般的には、道真の生誕した承和十二年（八四五）が乙丑の年にあたることがしばしば強調されるが、ことはそれほど単純ではなさそうである。

ますが、なかでも土佐光孚が描いた「天満宮御絵伝」は、五幅の掛幅本に通常の三七場面を描いた後に、当宮特有の「創祀の託宣」「創祀」「戎鳥御旅所」「鉾流神事」「船渡御」の五場面を加えた珍しいものです。本書でも、右の鈴木論文が、この光孚本に触れています。

また、論文とは別に四本のコラムも収録されているのですが、その一つに、竹居先生の「天神さんと牛」があります。



これまでの指摘も含めていえば、第一に、本文中にも触れたように、天満宮鎮座以前に「北野」の地にはすでに「雷公」が祀られていた事実があり、これは天神の神格の一つ「火雷神」にかかわる。由来、雷神は、

雨水の調節を要件とする農耕生活の面からは恵みの神である一方で、都市民にとつては落雷などによって被害をもたらす暴悪神の側面もあつた。他方、これと並行して、大陸の影響を受けた「殺牛祭神」の伝統があり、これまた時に祈雨、時には祟りの除去という目的で行われ、あたかも雷神信仰の二面性に対応するものがあった。牛は、この場合神に供えられ

る聖なる動物であつた。そして第二に、神号としては最も普及した「天満大自在天神」は、三目八臂で白牛に乗る姿で表現される、仏教の自在天に由来するとの見方もある。

さらには、これまた本文中に触れた、もう一つの神号「日本太政威徳天」も、密教の大威徳明王に由来しており、不動明王以下五体の明王五大明王のうち、唯一この明王のみが牛に騎乗する姿で表現されることも注意される。結局、主要な神号のいずれにも牛が関連しているわけで、このような点にも、天神信仰の多様性が表れているといえよう。

光格上皇と 大阪天満宮の御神影

相愛大学・近畿大学
非常勤講師

盛田 帝子

暁鐘成の『撰津名所図会大成』卷之十二の「天満宮」の箇所に、「百九代 後水尾天皇より神影および後陽成天皇御宸翰の神號を御寄附なし給ひ近くハ 光格天皇御信仰ふかくましゝて神影を御寄附し給ふ」という記述がある。江戸時代前期に京都御所で宮廷の文化を花開かせた後水尾天皇が、道真公や大阪天満宮に対して特別な思いを抱いていたことが、父である後陽成天皇の御宸翰の神号と、道真公の御神影の寄附という行為によって推し量られる記事である。

天満宮神主、滋岡家初代至長の時代に後水尾天皇が寄附された道真公の御神影は、その後、天保八年（一八三七）二月の大塩平八郎の乱の際に焼失してしまうことになるが、『撰津名所図会大成』によれば、御神影を亡くしてしまった大阪天満宮に、道真公に対して信仰の深かった、光格天皇が、また新たに寄附をなさったという。滋岡家十代功長の時代で

ある。

光格天皇は、明和八年（一七七二）八月十五日に誕生、天保十一年（一八四〇）十一月十九日、七十歳で崩御。天皇在位三十九年、讓位してから院政二十三年にわたり、長らく朝廷の運営を行う。好学の天皇として知られ、宮廷歌学の根幹を成していた御所伝受を前関白一条忠良公へ、途中まで授けていた仁孝天皇へは、亡くなる前日に御伝受の切紙を渡している。文化的にみても、特筆すべき天皇であり、内裏では、毎月二十五日に、道真公の御加護を祈念するために、聖廟御法楽歌会を行っている。光格天皇の道真公に対する信仰のほどが、推し量られる。

光格天皇の業績として、ここで記しておきたいのは、朝廷に関わるさまざまな儀式、神事、建物などを古に復し、再興したということである。例えば、神事についていえば、文化十年（一八一三）三月十五日に約三百八十年ぶりに石清水八幡宮の臨時

祭を再興し、また翌文化十一年の十一月には賀茂社臨時祭も再興した。

道真公の御神影を天満宮に寄附したのも、焼失した御神影を後水尾天皇の時代に復するという志向があったのだろうか。朝廷側から後水尾天皇御下賜の御神影の寸法・表粧・筆者名などの照会が行われている（東京滋岡家文書C―28）。

滋岡家十代功長がたびたび上京して公家である高辻家を通じて神影の御下賜を願っていたが（滋岡長平「神主滋岡家歴代の人物像とその事績について」『大阪天満宮史の研究』、大阪天満宮へ御神影が寄附されたのは、光格院が亡くなる前日の天保十一年十一月十八日のことであった。院の存命中に間に合う御下賜だったことが知られる。

東京滋岡家文書（C―35 天保十一年十一月）に、公家である高辻以長から天満宮の功長に宛てた文書がある。それには、仙洞御所（光格）より、当月十八日に、天満宮御神影

が御寄附されること、匱略に渡されることがあれば恐れ多いので、当分高辻家の鎮守社に仮に納め、吉日を選んで、沙汰に及ぶべきこと、その節は上京してほしいことなどが記されている。

御神影は、大塩平八郎の乱の後で、大阪天満宮の再建が終わっていないために、すぐに仙洞から天満宮へと引き渡せなかった。そこで高辻家の鎮守社へ一時的に納められたのである。高辻家は、菅原氏の氏の長者であり、また天満宮の地付きの神主であった神原家（菅原氏）が、明暦三年（一六五七）の三春の没後に断絶した後、後水尾院の院宣によつ

て、東坊城家の至長が高辻豊長の猶子となり、初代として滋岡の姓を賜って大坂に下向したという経緯がある（前掲滋岡論文）。御神影を受けることになる功長は至長からかぞえて十代目にあたる。高辻以長と滋岡功長は、同じ菅原氏で、両家は前記のような関係にあり、高辻家は執奏でもあるため、仮に御神影を安置する場所として高辻家を選ばれたのであろう。高辻家では、仙洞から御神影を下賜された直後から、大阪天満宮に納められる天保十四年三月二十日まで、御神影を保管している（東京滋岡家文書C―28）。

御神影は、土佐光孚が描いた。光

孚は、功長の母方の祖父である三宅行邦に御神影の写しを渡している。それを受け取った行邦は、天満宮側に、神影の概要を伝えた。すなわち「仙洞御所御寄附あらせられ候天満宮御神影御表粧色目書並びに御寸法書」（東京滋岡家文書C―35）である。寸法などは、現在大阪歴史博物館に寄託されている御神影と一致している。

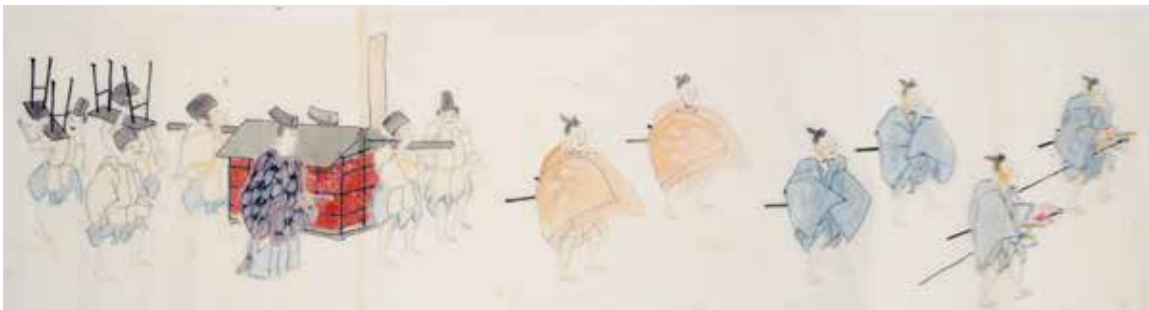
土佐光孚は安永九年（一七八〇）年生まれ、天保十一年には六十一歳である。画所預で従四位に叙せられ、土佐守に任ぜられている。寛政度の内裏清涼殿屏風などを画いている人物でもある。



光格院御寄附神影

結局御神影が天満宮に到着したのは、天保十四年（一八四三）の三月二十日のことであった。御神影を奉戴した総勢九十六名から成る美々しき行列が宮入を果たすのである（『大阪天満宮史の研究 第二集』カバ―解説）。天満宮神主の滋岡功長から執奏家の高辻以長へ届けられた「神影申下之道筋之事」（東京滋岡家文書C―36）によれば、御神影移動の正規の道筋は、京都の高辻以長家から丸太町、寺町を通って、五条橋を経、伏見街道を通って伏見駅に至り、京橋辺りで乗船し、大阪の淀川筋摂州東成郡中野村氏神の浜辺へ着船。備前島町を通り、京橋を渡って西へ、京橋通八軒家を過ぎ、天神橋を渡って東へ行き、浜通九丁目を通って大阪天満宮へ入るといったものだったようである。

光格院が生前の御沙汰として下賜された菅原道真公の御神影は、約二年四ヶ月の年月と、このような過程を経て、大阪天満宮に無事安置された。その後、厳重に守護されながら、嘉永五年（一八五二）などの御遠忌には諸人への御開帳があり、現在、大阪歴史博物館に寄託されているのである。



光格院御寄附「神影御下向行列之図」 筆者 大道元貞

天満地区

HOPEゾーン協議会の発足

HOPEゾーンとは？

去る六月二十六日、天満宮会館において、「天満地区HOPEゾーン協議会」の設立総会が開催されました。

HOPEゾーン事業とは、大阪市が国からの助成を受けて、市内の歴史的・文化的な町並みや雰囲気など、地域の特性を活かした、魅力ある住宅地の形成を図る事業です。

これまでに、大阪市の助成のもとに、「平野郷地区」「住吉大社周辺地区」「空堀地区」の三地区において実施されてきましたが、その四番目として「天満地区」が選ばれたのです。

協議会の発足

HOPEゾーン事業を進めるには、対象地域の住民による「HOPEゾーン協議会」を結成することになっています。

その地域の特色を活かした「まちづくり」を進めるためには、建築やデザインの専門家や、学識経験者など、住民の意見を集約することが不可欠だという考えに基づいています。

そこで、設立総会において、菅南の八十島善郎さんを会長とする役員会を選出しましたが、当宮からも寺井種治権宮司が理事に就任するとともに、当宮文化研究所もアドバイザーとして協力することになりました。具体的な活動としては、協議会ニュースの発行、まちなみ勉強会や、文化講座の開催、すぐれた建物への表彰活動、修景デザイン相談会の実施、住民向けのまちなみ相談会の開催などを展開していく予定です。

そこで、これらの多彩な日々の活動を進めるために、八月四日には、中岡勝さんをリーダーとする「まちなみ形成試行プロジェクト・実行委員会」を結成し、このメンバーにも、当宮の柳野等禰宜が参加することに

なりました。

まちなみ検討ワークショップ

同プロジェクトでは、すでに去る八月三十一日に、第一回まちなみ検討ワークショップとして、くらしの今昔館の新谷昭夫副館長の講義を受けた後に天満地区を歩き、また十一月二十九日には、第二回ワークショップとして、天一のゆうゆうホールで、天満らしい「しつらい」について話し合いました。

このほか一〇月二日には、当事業の先行地域として、大きな成果を挙げている「平野郷」の視察を行い、同事業の進め方や、まちなみのありかたについても情報を収集しました。

講演会

「まちづくりの可能性」

一〇月一二日には、当宮梅香学院において、『天満のしつらいとまちなみづくり』を開き、当宮文化研究所の高島幸次研究員の講演会を開きました。高島研究員は、歴史学

の立場から「天満におけるまちづくりの可能性」と題した講演を行い、専門の滋賀県におけるまちづくりの経験を踏まえて、次のような、具体的な提案を行いました。

《講演の要旨》まちづくりには、伝統を大切にすべきである。伝統といっても、古来から継続している本来伝統と、伝統のように見える擬似伝統がある。新たな企画を進めるときには、擬似伝統の仕掛けをするによって、人々は安心感を持って自然

に受け止めてくれる。

具体的には、江戸時代の天満地区には、町域ごとにデザインの異なる提灯があったが、これの復活を目指すべきである。

また、造り物（つくりもん）の伝統も復活して欲しい。造り物とは、蛸貝で藤棚を作るように、ありふれた日常品の「風合い」（手触りや見た感じ）に着目し、何か別のものに

「見立て」（他のものになぞらえる）た造形物をいう。

さらには表門を南下した大川に水中鳥居を建ててはどうか。水都大阪をいうのなら、船中からみた景観にも留意すべきである。

流鏝馬神事の「しつらい」

一〇月二四日には、当宮の流鏝馬

神事に際して、次のような、四種の「しつらい」（飾りつけ）を試み

- ① 笹と絵馬短冊Ⅱ当宮提供の笹に絵馬型の短冊を表参道の軒先に飾り付けました。
- ② 提灯Ⅱ天神祭の提灯を天神筋町会から借用して、初めて流鏝馬に吊るしました。
- ③ 幔幕Ⅱ天神筋町会、および参道沿

いの各戸でご所有の幔幕を五カ所で飾りました。

- ④ 門帳Ⅱ当宮の表門に「門帳」を飾りました。

このように、ささやかですが、徐々に天満のまちなみを考える動きが本格化しています。当宮の門前町として成立した天満地区が、再び個性ある美しく住みやすい町として生まれ変わることを期待したいですね。



天満天神えびす祭

一月八日に招福行列を復興
人力車に桂春團治師匠が



◆北新地の芸妓さんが

平成十九年に、約半世紀ぶりに神賑行事を復興した「天満天神えびす祭」も、今年で三年目となります。復興当初は、暗中模索のご奉仕でしたが、三年目ともなると、宵えびす（九日）・本えびす（一〇日）・残り福（二一日）の充実だけではなく、先例の復活も課題となってきました。特に、北新地の芸妓さんによる「宝永籠（ほえかご）行列」の復活は、往時を知る方々からも、強いご希望が寄せられています。

戦後まもなくまで、当宮の初天神には、北新地の芸妓さんが乗った宝永籠が当宮に参拝される慣例でした。残念ながら、昭和二十三年一月のえ

びす祭を最後に中絶していたものです（昭和四十七・四十八年に一時的に再興）。そこで、北新地組合にお願いしましたところ、北新地平田席の芸妓さんお二人に参拝いただくことになりました。

◆春團治師匠が人力車に

しかし、今回の復興に当たっては、往時のままに再現するのではなく、いくつかの新機軸も加味しました。一つには、駕籠ではなく、人力車による参拝です。当宮に隣接する天満天神繁昌亭には、初代春團治にちなんだ「赤い人力車」が飾られています。それを借用し、三代目春團治師匠に乗っていただくのです。上方落語の最盛期を築いた初代春團治が、寄席から寄席へ駆け廻ったという伝説を持つ人力車によって、参拝いただくという企画です。

◆初代北新地クイーンも

このような企画を立案していただき、昨年十一月には、北新地で第一回「北新地クイーン」選考会が開かれましたが、その関係者から、クイーンの参拝についての打診がありました。

そこで様々な可能性を検討した結

果、三代目桂春團治師匠、北新地のさく良さん・さく弓さんの御三方に、北新地クイーンの藤崎まり子さん、準クイーンの坂上由紀さん・宮上琴音さんを加えた豪華な招福行列を仕立てていただくことになったのです。

◆招福行列のコース

行列は、堂島薬師堂前を出発し、北新地本通から西天満町内老松通りを経て、天神橋筋商店街一丁目南口から当宮へ宮入し、本殿において商売繁昌祈願祭を執行し「福笹」を授与された後に、北門を出発して天満天神繁昌亭前を通過して商店街二丁目を経て西天満へ向かい、北新地へ到着するというコースを計画しています。

その道中は、幟や提灯を飾り立て、賑やかにお囃子を流しながら練り歩きます。本殿前では上方落語協会の皆さんがお囃子演奏してお出迎えいただきますので、一日早い「えびす祭」気分も盛り上がることでしょう。

なお、この行列は、当宮の氏子崇敬者の若手グループである「大阪天満宮青年親睦会」（土居由憲会長）が主催し、北新地社交料飲協会と、地元堂島地区町会、および上方落語協会の協力を得て実施されます。



和歌山県みなべ町から 献梅二本

十一月二十五日午前十一時、和歌山県みなべ町の南部梅林と、岩代大梅林から紅白一対の梅の木が奉納植樹され、本殿において奉納式が斎行されました。

これは、みなべ町観光協会の発案によるもので、和歌山みなべ町にある二カ所にある梅林のことを、より多くの皆さんに知って頂くために、当宮への奉納を計画されたものです。当日早朝、和歌山を出発した梅の木は、九時過ぎに当宮に到着し、早速作業を開始、大工門（北門）の社号標横に、見事な梅の木二本が植えられました。

その後、同協会・中松会長、梅の



里観梅協会・山崎会長、岩代大梅林観梅協会・泰地会長、当宮の御料梅林を奉仕されている東農園（みなべ町）・東専務、氏子総代・天神橋筋商店連合会・土居会長など十五名、および宮司以下担当神職が参列して奉納式が厳粛に斎行されたあと、植樹式がとり行われました。



大阪天満宮献詠 風月社

平成二十年下半期秀歌

街燈に家路眞近し虫の聲

金木犀も歸り待つらし

選者 浅井與四郎

やすらけくうかびあからせ降る雨を

砂金の如くてらす街燈

幹事 佐野 秀子

明るさのひときは増せる街燈の

光りに映ゆる銀杏の並木

幹事 森本美也子

初市に何を買ひしか妻娘

くすくす笑ひ歸り來たりぬ

幹事 松村 曉二

天草の松茸二本競りに出て

築地初市驚く高値

堺 永田 民子

小雪舞ひはほ赤く染む幼子の

笑顔並べる初市の街

京都 塩小路淳子

菅公を偲ぶ涙か白梅の

光る雫の落つるあけぼの

神戸 鈴木 敬子

降る雪の中に白梅凜として

百花にささかけ春を誘ふ

東大阪 宝藏寺京子

疼く身にコタツフトンと重ねつ、

老にせはしき寒の夜の月

大阪 金行 久夫

第六回

てんま天神梅まつり

今年の「てんま天神梅まつり」は、二月一〇日（火）から三月八日（日）に開催することになりました。その中心となる「大盆梅展」の会場は、午前九時半から四時まで開きます。例年の通り、左記のような企画が目白押しです。ぜひ、今年も御観梅ください。

《夜間行事》 午後八時まで

勸進御能（観世流） 二月三日
狂言（茂山社中） 二〇日
講談（旭堂南陵） 二〇日
巫女神楽（神樂教室） 二七日

《催し物》

骨董市 二月一〇日～一六日
陶器市 一七日～二三日
梅酒市 一七日～二三日
アートクラフト 二四日～二日
古書市 三月四日～八日
観梅茶会 五日
振る舞い餅 八日

《出店》

天満みやげ、大阪名物の店舗、オーブンカフェ、など。

制服に埋れ聖火は走り行く

西藏の旗揺らめく信濃

西宮 牛田眞理子

制服の姿凛々しき女の車掌

新幹線に發車の笛を

大阪 松村龍太郎

枕邊の机に赤きバラ薫り

贈りし嫁の心うれしき

大阪 大北 滋保

朝夕に忘れぬ言葉ただ一つ

誠の心代々に傳へよ

京都 塩小路光宇

姑に誠をもちてつかへよと

父は言ひたり吾か婚ぐ朝

東大阪 中山 里江

江の島でボートが沈み今も尚

歌ひつがれる十二の命

大阪 中瀬 央子

亡き母の煮付けてくれし薄味の

ずいき懐かし八十路越えきて

大阪 西脇 かつ

漆黒の町に街燈瞬きて

友驚ける枚方夜景

枚方 草野 明子

夕ぐれは街燈のもとに集まりて

石蹴り鐘蹴りあそびくらしき

吹田 岩城 富子

様々にネオンあふるる夜の街

うもれて淋し低き街燈

欄宜 柳野 等

九州国立博物館の特別展

「国宝 天神さま」

同館研究員 松川 博 一

◆一〇〇年ぶりの国立博物館

九州国立博物館は、平成十七年秋、東京・京都・奈良に次ぐ四番目の国立博物館として太宰府天満宮の「天神さま」の杜に誕生しました。古代の太宰府がアジアとの交流の窓口であったことから、日本とアジアをはじめとした諸地域との文化交流の歴史をテーマとした国立博物館です。

「日本文化の形成をアジア史的観点から捉える」をコンセプトに、多様な展示やイベントを展開しています。また、太宰府天満宮をはじめ地元

の熱意溢れる誘致運動により実現した、百年ぶりにできる国立博物館でもあります。日本全国や中国・韓国をはじめとしたアジア各地から多くの方々にお越し頂き、平成二十年八月には三年を待たずして入館者五百万人を達成しました。

◆菅公ゆかりの至宝を一堂に

平成二十年、九州国立博物館では、

開館三周年を記念して特別展「国宝 天神さまー菅原道真の時代と天満宮の至宝ー」（平成二十年九月二十三日～十一月三十日）を開催いたしました。菅原道真公終焉の地である太宰府に日本全国から「天神さま」ゆかりの至宝が一堂に会しました。その数は、国宝十八点、重要文化財二十一点を含む約百二十点にのぼります。本展では、菅公ゆかりの遺品や全国の天満宮のご宝物を通じて、道真公の波乱に満ちた生涯と天神信仰のひろがりを紹介いたしました。

道真公が居られた頃の太宰府を偲ぶ遺品として、漢詩「不出門」に「観音寺の鐘」「都府樓の瓦」と詠まれた国宝の「梵鐘」（観世音寺所蔵）と重要文化財の「鬼瓦」（九州国立博物館所蔵）が展示されました。また、道真公の住まいがあつた榎社の周辺から近年発見された帯飾り「白玉帯」（太宰府市教育委員会所蔵）も登場し話題となりました。さらに道真公が太宰府に葬られることを望んだとの

遺言を収めた最古の伝記「北野天神御伝」（荏柄天神社所蔵）や展覧会初公開となる「太宰府絵図」（道明寺天満宮所蔵）も出品され研究者の熱い視線の的となりました。

道真公の生涯を描いた天神縁起絵巻は、「門外不出の根本縁起」といわれた国宝・承久本（北野天満宮所蔵）をはじめ、弘安本（同所蔵）や松崎天神縁起絵巻（防府天満宮所蔵）・荏柄天神縁起絵巻（前田育徳会所蔵）、アメリカのメトロポリタン美術館本など、選りすぐりの天神縁起絵巻が揃い、多くの人々を魅了したのでした。また、この度、長崎県対馬で新発見された天満宮縁起絵巻（八幡宮神社所蔵）は、江戸時代初期の



九州国立博物館 外観

もので梅が枝餅の起源や綱敷天神・水鏡天神など、福岡ゆかりの天神伝承を多く含む唯一の天神縁起絵巻として注目されました。この発見を契機にこの他にも九州各地から天神縁起絵巻の情報が寄せられ、今後の研究の進展が期待されます。

◆大阪天満宮からも天神画像三幅

大阪天満宮からは、数多い天神像のご所蔵品のうち三幅の束帯天神像をご出陳頂きました。伝統的な技法を踏まえ表現の優れた束帯姿の「天神坐像」、雪舟の弟子・秋月筆とされる梅松の樹林の中に坐す「天神像」（写真）、左手で太刀を握り右手で梅の枝をかける立ち姿の「天神立像」の三点です。なかでも「天神立像」は、束帯天神像と渡唐天神像の両様

の性格を併せ持った稀少な画像であり、天神信仰の多様さを示す貴重な事例です。今回の展覧会では、「学問の神様」以外の天神さまのいろいろな顔を紹介いたします。会期中、約十七万五千人的お客様にご来場頂きました。

御文庫講じ奉仕による

当宮文庫曝書

去る十一月三十日、大阪の出版社で構成される大阪書林御文庫講によって、当宮の御文庫蔵書の曝書が行われました。江戸時代の秋の恒例行事であつた曝書は明治初年に中断した後、平成十年に復活されたものです。

当日十時から本殿参拝し、参加各社の新刊本を奉納した後、十時半頃から、神主たちも加わり、総勢三十名ほどで、曝書作業に取り掛かりました。

御文庫の一階には「漢籍」が、二階には「国書（和本）」が収蔵されています。膨大な蔵書を一気に運び出すのは無理なため、毎年運び出す書籍を限定して作業を進めてきましたが、前回の作業でようやく一・二階の曝書を終えたので、今回は平成十年の復活時に行った二階の国書の曝書に戻りました。十年で一順したということです。あらためて御文庫の蔵書の多さに驚かされた次第です。

今回対象となった二階の蔵書は、「菅神聖廟（ビョウ）文庫奉納書籍」などと書かれた木箱に納められ、約二百五十箱を数えます。御文庫講の皆さんと神主が、それらを一人一箱ずつ大事に運び出し、梅香学院の二階で一冊ずつほこりをはらい、風を通していきました。今年は約四十箱分の曝書がすみました。



風土とともに「天神さま」を感じて頂けたのも「菅原道真終焉の地」そして「天神信仰のふるさと」である太宰府ならではといえます。

修繕され、今回もとの場所へと納められました。

実は、昨年の予定日は天候不順であつたため、今年の五月に延期されました。ですから今年は二回目という変則的な曝書でしたが、午前中のすっきりしない天気も、お昼ごろには乾燥した空気に恵まれ、無事に終えることができました。

現在も、多くの研究者が、御文庫の閲覧に来所されます。今後とも、貴重な御文庫を守り続けていかねば、と決意を新たにしました。

御旅所

雑喉場から戎島へ

戎島(梅本町)から松島へ

当宮社報第三五号に「御旅所の変遷と御神輿・御鳳輦乗船場の変遷」と題して、江戸時代はじめの御旅所の設定とその後二度に亘る転宮について、簡単に述べました。今回は、御旅所が雑喉場(現西区京町堀二・推定)から戎島(現西区川口二)に遷った時期についての考察と、明治に入ってから、戎島から松島(現西区千代崎二)へどのような経緯で転宮したのかについて、記したいと思います。

雑喉場から戎島への転宮はいくつか

江戸時代のはじめに、御旅所をそのころは驚島とよばれていた土地の西端部、京町堀川流末の地に設定します。その地にはやがて雑喉場魚市場が成立し、御旅所は「雑喉場の御旅所」と称されるようになりました。御旅所が雑喉場から戎島へ転宮したのは明暦二年(一六五六)であるとされてきました(『大阪天満宮略史』昭和三年刊)。ところが、明暦三年刊の「新板大坂之図」には、その場所に「天神おたひ」とはつきり記され

ており、明暦二年転宮説はおかしいことになります。明暦二年説の根拠となった史料は「阪大滋岡家文書」No.179の「明暦年間天満宮祭禮之節町々江御觸之写」で、その中に

寛

天神祭禮ニ町中より出候ねりもの渡候次第、御旅所雑喉場町先年より三番ニ定来候處、去年より戎嶋御旅所ニ成候間、任先例戎嶋三番ニねり可申候、雑喉場町ハ四番ニねり、從惣町中出候ねりものハ毎年之通圖取いたし、番付次第ねり可申候、此外之儀者先規之通相守候様、町中可觸知者也

西六月廿日

(傍点は筆者)

という写し書があります。その日付の下に「明暦三丁酉年ナルヘシ然ハ御旅所雑喉場ノ戎島へ引移候者明暦二年丙申ナルヘシ」という後筆の書き込み(朱書)がされています。

この「寛」は、二番目に書かれており、西六月廿日につづいて、「右御觸書者明暦元より延宝二まで西地方御仕置觸書留ニ有之」と記されていますので、西六月は明暦三年

よりひと回り後の寛文九己酉年(二六六九)と考えてもいいわけです。つまり移転は寛文八年となります。それに、延宝三乙卯年(二六七五)刊行の『蘆分船』に「天神御旅所」について「本は、京町といふにありしが。近曾恵比須嶋といふにうつしけり」との記述があります。寛文八年は延宝三年より七年以前となって、近曾うつしたというには、少し苦しい感

がありますが、これまで私は、雑喉場の魚市場の成立年代と考え合わせて、転宮の時期を寛文・延宝三年までと推定しており(『大阪天満宮御旅所の変遷と江戸時代の天神祭船渡御』『大阪春秋』No.132)、寛文八年ならばほぼ納得できるのです。

寛文八年転宮説は、明治三十一年二月二十日に大阪府御裁判所宛に提出した「口上覚」(A-25)の中に「但右旅所去明暦年中大坂雑喉場ノ今之地江引移ニ相成候事」とあり、

寛文八年転宮説は、明治三十一年二月二十日に大阪府御裁判所宛に提出した「口上覚」(A-25)の中に「但右旅所去明暦年中大坂雑喉場ノ今之地江引移ニ相成候事」とあり、

その行の左傍に小字で「明暦二年丙申カ寛文八年戊申」と後筆による書き込みがされています。先人にもそう考えた方がおられたのですね。寛文八年に戎島に遷った御旅所は、明治初年まで二百年余の間つづいたことになります。

明治初年

御旅所 戎島(梅本町)から松島へ

幕末、慶応元年(一八六五)から天神祭では神輿渡御を中止し、明治四年(一八七二)に至って、伝統の船渡御を復活させています。幕末明治の六年間、神輿渡御はできなかったのです。明治四年、船渡御は、戎島(梅本町)御旅所ではなく松島(堀内)の土地を借り受け、そこへ遷幸しています。

御旅所の松島転宮については、元大阪天満宮史料室長若林喜三郎氏がくわしく考証しておられます(『幕末維新期における大坂の世相と天神祭』『大阪天満宮史の研究』)。また、



① 雑喉場御旅所(推定)

② 戎島御旅所

③ 松島御旅所

「大阪全図」(明治36年刊)

それについて、川口居留地の視点から、大阪市史編纂所長堀田暁生氏が論文を発表しておられます(「川口居留地と梅本町御旅所」『大阪天満宮史の研究第二集』)。この両論文をもとに、転宮の経緯をのべて参りましょう。

明治四年四月二日に天満社氏惣代五名と同旅所氏惣代三名、松嶋廓支配人二名が連名で、大阪府御廳あてに出した「乍恐口上」(C-46)では、昨年府庁より、本年六月には是非とも「神祭船陸神輿渡御」を執行せよと仰渡されたが「差當り梅本町旅所大破および」渡御はできないので、松嶋廓内明地所へ仮旅所を設

けたいと願っています。その願いは聞き届けられ、明治四年六月二十五日には、松島仮旅所への船渡御を復活することができました。

同年八月二十二日、大坂府廳あて「口上覚」(G-102)によると「梅本町旅所があまりに大破しているし、周辺が外国人居留地になり、祭禮の際、神輿昇・太鼓方など無礼の振舞があるかもしれないので、松嶋花園地に梅本町旅所と同面積の土地を拝借し転宮させていただきたい」旨、願ひ出て、聞き届けられました。

この転宮の原因となった梅本町御旅所の大破の原因について、堀田暁生氏は「慶応四年五月および七月に



「戎島御旅所」
「初代長谷川貞信が描いた幕末・明治の大阪」
—「水の都」の原風景—(大阪城天守閣)



久留米藩蔵屋敷 水天宮祭祀(『御田祝』昭和58年 神崎屋宗兵衛発行)
(この社殿を松島御旅所へ譲り受けた)



松島御旅所 (大正～昭和のはじめごろか)

大坂を襲った洪水に求めるのは無理であろうか」と述べておられます。また、同氏は、大阪天満宮側からの口上書では、神輿昇・太鼓方などの我々な者の無礼な振舞があつてはいけないとしているが「文面に出ないこととして、御旅所が、雑居地の中に含まれ、清浄な場所を尊ぶ神社としては問題があると考えられたのではなからうか」と考察されています。翌明治五年二月九日に梅本町御旅所の地所を返上し、松島への転宮が成立しました。天神祭船渡御は、明治五年も執行されましたが、明治六年からは、川渡いが行き届かず、陸渡御での遷幸となりました。

明治七年十二月十四日付の「天神旅所假社大破ニ付造営願」(「公廳諸願届寫」(原本不明))によると、旅所假社殿が大破したため、元筑後邸(久留米藩蔵屋敷)に祀られていた水天宮の社殿を譲り受け、旅所の社殿を造営したいと大阪府権知事渡辺昇に願ひ出ています。この仮社殿大破の原因を「当番所雑誌」十二月十四日の記事「戍刻地震」に求めたいのですが、戍刻は午後八時で、造営願の方が先に出版されていたことになり、辻褄があいません。翌明治八年十月には、松島旅所の社殿は落成し、十月十八日正遷宮、翌十九日から二十七日まで祭式を執行し、御旅所の松島転宮は完了したのです。

松島御旅所の社殿は、昭和二十年三月十三日夜中・十四日未明の第一次大阪大空襲で全焼しました(『社務日誌』K1-73)。そのとき、御神体は壕に奉安中で無事でしたので、三月十六日に行宮の御神体を本社に奉遷しています。戦後、松島(千代崎)御旅所には、仮社殿を建築して現在に至っております。本格的な社殿をという復興計画も考慮中です。

(大阪天満宮文化研究所 近江晴子)

タイ王国 ロイ・クラトン祭りに参加

十一月七日から十二日まで、当宮の寺井宮司をはじめ、講社連合会の片山巖会長、藤田康夫氏子総代ら十三名が、タイ王国を訪問しました。今回の訪問は、政府観光大臣のご招待によるもので、タイ王国全土で盛大に行われるロイ・クラトン見学が目的でした。

ロイ・クラトンは、川の女神に感謝を捧げるタイの伝統行事のことです。「ロイ」は「流す」、「クラトン」は、ももとは「バナナの葉で作った入れ物」を意味しましたが、このお祭では、蓮の花などをかたど

って造った灯籠のことを指します。具体的には、この灯籠に、ローソクや線香、花などを入れて水に流しますので、日本では「灯籠流し」と訳されているようです。

●タイ観光庁、天神祭に参加

タイ王国と、当宮との関わりは、平成十九年の「日タイ修好百二十周年」を記念して、タイ国政府観光庁の皆様が天神祭船渡御に乗船されたことに始まります。また、昨年の船渡御では、七月二十四日の宵宮に大川において、本国さながらの「ロイ・クラトン」を奉納されています。



また、翌二十五日の本宮には、政府観光庁副総裁アカボン・ブルックサワン様が神霊移御祭に御参向され、タイ国政府代表として御拝礼されました。このようなご縁から、今回の

訪問となったものです。

●バンコクとタークで参加

今回の公式訪問では、バンコクとタークの二カ所でロイ・クラトン・フェスティバルに参加させていただくとともに、バンコクでは、観光スポーツ大臣ヴァーラサック・コースラット様を、タークではソムチャート・ペットプラサーソ市長を表敬訪問しました。

バンコクのロイ・クラトンは、チャオプラヤ川に浮かぶ装飾された船に、天神祭の船渡御にも勝るとも劣らない迫力の伝統行事でした。一方、タークのロイ・クラトンは、バンコクの現代的な装飾とは異なり、線香、花をバナナの葉で蓮の花のように籠に飾りつけた昔ながらのクラトンが流され、その情緒あふれる行事は感慨深いものでした。

ロイ・クラトンの他にも、タイ王国の様々な文化財や施設の見学も行いました。バンコクでは、観光寺院として有名な「暁の寺」(ワット・アールン)・エメラルド寺院(ワット・プラケオ)・王宮や、王室御座船博物館などを見学しました。スイーサツチャナライでは、歴史公園見学の後、スコータイの伝統金細工や織物



村を見学しました。ツアーでは、政府観光庁大阪事務所長ジャラン・オンミー様以下、三名の職員の方々にご同行いただき、大変手厚いもてなしをいただきました。この紙面を借りまして、厚く御礼申し上げます。

また、両国が末永く友好を暖め、天神祭とロイクラトンが同じ火と水の祭典として世界に誇れるお祭りとして永遠に伝承されますことを祈念しております。(権欄宜 大橋弘邦)

紅 わ ら べ



去る八月五日・六日の二日間、全国天満宮梅風会主催の「神楽講習会」が当宮において開催されました。同講習会は、平成十四年菅原道真公一千百年式年大祭を記念して、梅風会が企画し、元宮内庁楽部楽師の芝祐靖先生が作曲・作舞された神職舞「桃李霞」と、巫女舞「紅わらべ」を伝習するために始まったものです。第八回となった今回は、全国から三十六名の希望者が当宮に参集し、熱心に受講するとともに、「修了奉告祭」において、全員が交代で舞を奉納しました。

浪速菅廟吟社詠草

雪稜 松村曉二撰

七月課題 「江頭夜景」

千載長江萬里流 鵬城 北野修司
樓船停埠夜陰稠 有聲堤上人何在 一點殘燈絕俗幽
(訓読)千載の長江万里の流れ、樓船埠に停めれば夜陰稠し。堤上に声ある人も人いづくにか在る、一点の残灯俗を絶ちて幽なり。
〔語釈〕江頭Ⅱ川の畔。樓船Ⅱ二階建て以上の船。稠Ⅱしげしいこと。ここでは夜が深い。
(詩意)長江の流は昔から長々と流れている。大きな船が埠頭に停泊して夜も深く。堤のあたりで声がする、でも人の気配を感じない、ただ一つ消えかかった街灯が世俗を絶っているかのようだ。

七月席題 「深山觀瀑」

秋鳳 樋口達彦

偶訪深山牽勝情 瀑聲亂沫更縱橫 一蟬呼夢無知暑 此景欲描終不成
(訓読)たまたま深山を訪えば勝情を牽く、瀑声乱沫さらに縦横。一蟬夢を呼んで暑を知るなし、此の景描かんとするもついにならず。
〔語釈〕深山觀瀑Ⅱ深山で滝を見た。偶Ⅱ偶さか。勝情Ⅱすぐれた景色。牽Ⅱ心が牽かれること。
(詩意)たまたま深山に来て素晴らし景色を見た。滝の音は飛沫を飛ばしている。蟬の声がここでは涼しく

市立歴史館いずみさの

平成二十年秋季特別展に当宮御文庫蔵本を出品

平成二十年十月十八日(土)～十一月三十日(日)、歴史館いずみさのでは、特別展「日根荘と根来寺―戦国を生きた人びと―」を開催致しました。大阪天満宮所蔵資料としては、日根荘の領主九条家の故実に関わる「九条家車図」、公家三条西実隆の高野・根来参詣までを記した参詣記「住吉紀行」、信長や秀吉の紀州攻めを描いた「紀伊国名所図会」、根来寺と結んでいた和泉国の土豪新川家による文芸史料「蟻通明神法楽連歌」などが展示されました。



大阪天満宮蔵「紀伊国名所図会」
—秀吉軍の根来寺攻め—

(歴史館いずみさの学芸員 廣田浩治)

感じ、描こうとして描けなかった。

九月課題 「軒下爽籟」

悠山 永井達也

夕暮草庵殘暑空 風過軒下聽吟蟲 庭柯影淡已秋聲 獨嘆把杯斜照中
(訓読)夕暮の草庵残暑空しく、風過ぐ軒下吟虫を聴く。庭柯の影淡くしてすでに秋声、独り嘆じて杯を把る斜照の中。
〔語釈〕庭柯Ⅱ庭木、その枝ぶり。
(詩意)夕暮れの私の草の庵は残暑も無くなって、爽やかな風が通る軒下で虫が鳴いている。庭木の枝にも秋の気配である。自分自身の秋に嘆じ酒を呑もうとすればすでに夕日がさしていた。

十月課題 「觀月秋思」

雪稜 松村曉二

中秋菅廟有清風 畏坐神前爽玉蟲 月照管弦纔妙韻 幽玄境地占宵穹
(訓読)中秋の菅廟清風あり、神前に畏坐すれば玉虫爽やかなり。月は管弦を照らして妙韻をひるがえす、幽玄の境地宵穹を占む。
〔語釈〕菅廟Ⅱ天満宮。畏坐Ⅱかしこまってすわる。妙韻Ⅱ妙な音楽。宵穹Ⅱ宵の空。
(詩意)中秋の天満宮は秋思祭が齎行され、畏れかしこまって坐れば鈴虫がさわやかである。月は雅楽の舞人を照らし妙なる響きをひるがえして、この幽玄の世界が宵の空を占領しているかのようである。

懐かしの街頭紙芝居が

境内にやってきた

去る十一月の毎週土曜日、当宮境内で昔懐かしい街頭紙芝居が上演されました。

紙芝居は、昭和二十年から三十年ころまでは全国どこでも見ることができましたが、テレビ放送の普及に伴って次第に衰退しました。しかし、幸いなことに、西成区にある「塩

崎おとぎ紙芝居博物館」には、当時の紙芝居二万巻以上が所蔵されており、ここを中心に、紙芝居総合センター「三国会」（さんゆうかい）の皆さんが、未来の子供たちに紙芝居を伝える活動をされています。

今回の上演も、三国会に所属する紙芝居師の皆さんによって行われたもので、「猫婆（別名コケカキキ）」「白馬童子」「怪談 ざくろ」「恐怖のフランク」「黄金バット」などの演目がかけられました。

この日、初めて紙芝居を観る子どもたちだけではな



く、幼い頃に近くの広っぱや街角で紙芝居に夢中になっていたような御年配の方々も一緒に、時を忘れて紙芝居の世界に入り込んでいらつしました。

今後も毎月定期的な上演や、「てんま天神梅まつり」などの、様々な機会に随時に上演していただくこと

を計画しています。その節には、あたかもタイムスリップしたかのような境内風景がみられることでしょう。

大阪府楽座事業の一環として

なお、今回の活動は、平成二十年度大阪府楽座事業採択計画の指定を受けています。楽座事業とは、歴史的建造物を活用して行う文化活動に對して助成されるもので、実は、天神祭に展示される、天満天神御伽衆の「造り物」も、同事業の指定を受けています。

■ 人事任免

《退職》

平成二十年十月三十一日

巫女 杉山 夏紀

編集後記

去る平成一三年には菅原道真公一〇〇年祭に向けて、大阪市立美術館などで「天神様の美術展」が開催されたことは、まだ記憶に新しいところですが、今年は九州国立博物館で特別展「国宝 天神さま」が開かれました。太宰府天満宮に隣接して立地していることもあってか、中国や韓国からの観客も見られました。「渡唐天神」の伝説を持つ天神様に、異国のお客さんほどのような印象を持たれたのでしょうか。

大阪天満宮社報

てんまてんじん 第55号

平成20年12月20日印刷

平成21年1月1日発行

発行人 寺井種伯

発行所 大阪天満宮社務所

〒530-0041 大阪市北区天神橋2-1-8

TEL 06-6353-0025

印刷所 木村印刷株式会社